

音源の比較試聴(10)

—ハイドンのオラトリオ《四季》—

1. 始めに

前報(9)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果をも、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のハイドンのオラトリオ《四季》を聴いていきます。

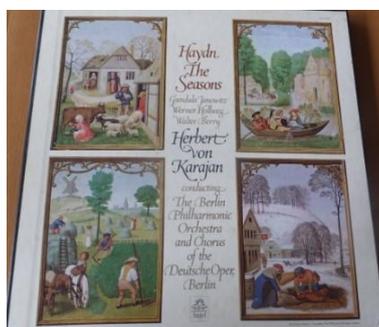
ヨーゼフ・ハイドン：オラトリオ《四季》 Hob.XXI

アナログ盤

ANGEL EAA-90037-9

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ベルリンフィル

グンドウラ・ヤノヴィッツ、ウエルナー・ホルバーク、ワルター・ペリー
ベルリン・ドイツオ・ペラ合唱団

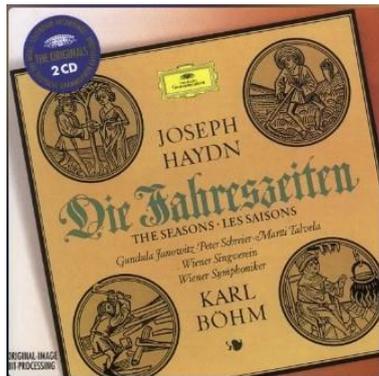


STAGE+

カール・ベーム指揮ウィーン交響楽団

マルツェイ・タルヴェラ、ペーター・シュライアー、グンドウラ・ヤノヴィッツ
クルト・ラップ

ウィーン楽友協会合唱団



3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤のカラヤンの演奏は、1972年11月の録音盤です。カラヤン流のドラマチックな演奏です。ソリストは、オーケストラの後方に位置するように聴こえます。

STAGE+のベームの演奏は、1967年4月のウィーン楽友協会大ホールでの録音からの配信用リマスターです。かなり古い収録からのリマスターの配信ですから、どうかと思いながら聴いていましたが、ソリストが前面に出て生き生きとした歌唱を示し、オーケストラや合唱も迫力を出しており、もともとアナログマスターであり、はたまたまからと言うことでアナログ盤に劣っていることはありません。

ドラマチックなカラヤンに対し、構成のしっかりした端正なベームといった印象で、そういった演奏の姿勢の違いも分かります。

4. まとめ

いずれをとっても、アースアクライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらにはAVドーナッツなどの結果、収録は古いものですが、すべて効果がそれなりに現れ、演奏の違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上